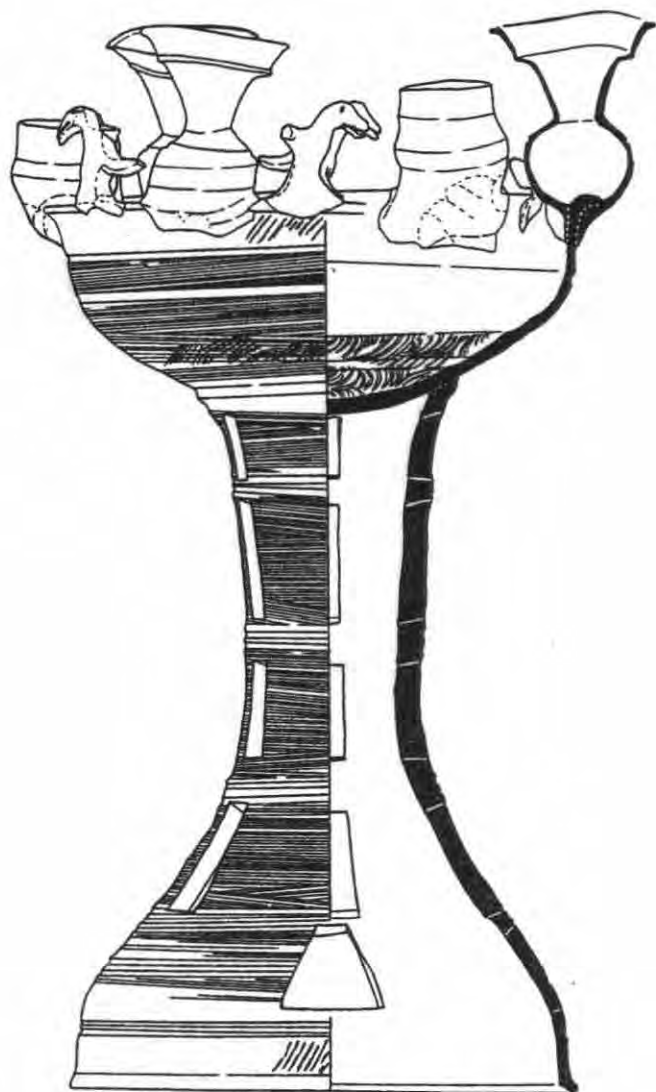


大石古墳 現地説明会資料

平成2年9月1日

(財)八尾市文化財調査研究会



装飾器台 (S=1/4)

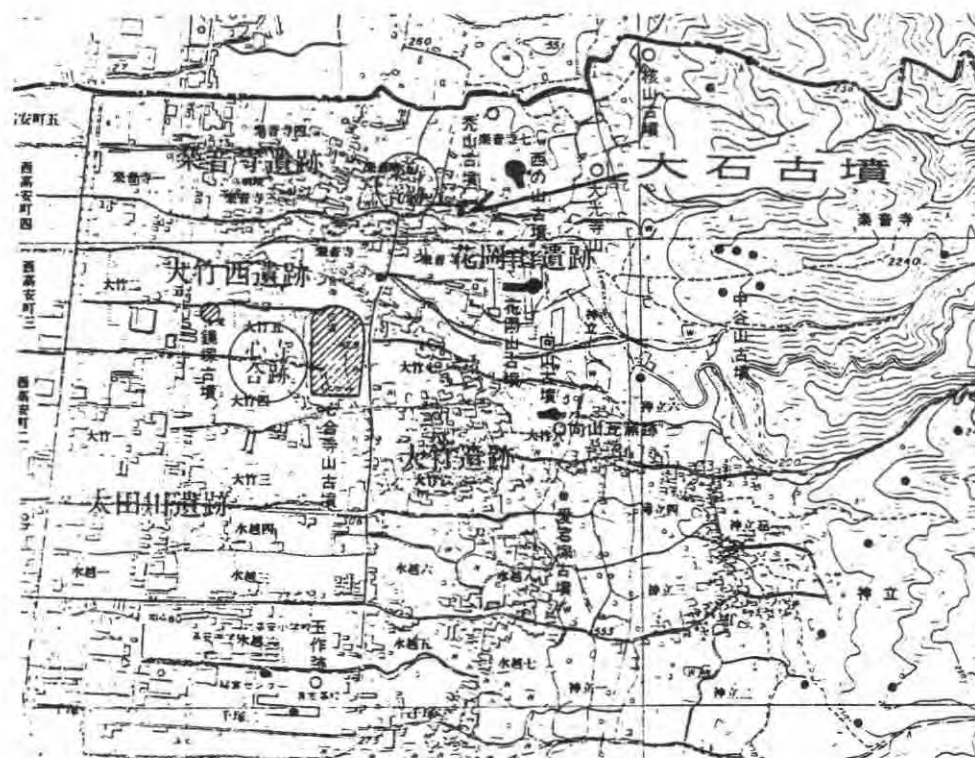
1 はじめに

大石古墳は、八尾市教育委員会文化財室が楽音寺6丁目29で行った試掘調査で発見された古墳で、小字名から大石古墳と名付けられたものです。その後、当調査研究会が、平成2年8月7日より発掘調査を行ってきました。今回は、その調査成果について現地説明会を実施して公開するものです。

2 高安古墳群と大石古墳

高安古墳群は、八尾市の東部、生駒山西麓一帯に位置し、古墳時代前期～終末期（4世紀～7世紀）の古墳が存在しています。前期～中期では、北部地域の「楽音寺・大竹古墳群」があり、前期の西ノ山古墳、中期の花岡山古墳・中ノ谷古墳・心合寺山古墳などが知られています。後期～終末期では「高安千塚」の名前で知られているように、約300基以上の小規模な円墳（直径10～25m）が密集する群集墳が形成されています。これまでに大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会等により調査が行われており、多くの成果が得られています。

大石古墳は、位置的には前記の「楽音寺・大竹古墳群」の範囲に含まれ、西ノ山古墳の南西約130mの地点にあたり、標高は約43.7mです。地形的には西ノ山古墳が築造されている独立丘陵の南西斜面になります。



調査区位置図

3 調査成果

【埋葬施設】

埋葬施設は、南西に開口する無袖式の横穴式石室です。丘陵斜面を水平に掘りくぼめて、その中に造られています。石材は、天井石をはじめ上部のほとんどが取り除かれていましたが、奥壁の1段目、側壁の1～2段目までが残っていました。

規模は、全長8.0m以上、玄室長3.6m、同幅約1.5m、羨道長4.4m以上、同幅約1.55mで、高さは不明です。また、石室の掘方は、全長約9.0m以上、幅約4.0mです。

床面は石敷きで、10～40cmの石が、石室内一面に敷きつめられていました。そしてこの敷石の上に、玄室部に2基、羨道部に1基の木棺が納められていたと考えられます。これは耳環等の出土遺物や、木棺に使用されていた鉄釘の位置、土層断面の観察から確認されました。

【出土遺物】

副葬品として、土器・鉄刀・馬具・耳環が出土しました。

【玄室】

土器—須恵器の装飾器台1・器台脚部1・有蓋高杯3セット・台付き長頸壺の蓋2（本体の口縁部片1）・罍1・提瓶1、土師器の高杯2があり、北東角にまとまって出土しました。装飾器台は、高さ57cmで、口縁部には鳥—6個・罍—3個・壺—3個が付いています。

鉄刀—全長85cm・刃部長74cm・刃部幅3cmを測ります。また鐔は透穴をもつものです。奥壁に沿って、刃先を北西に向けて置かれていました。

馬具—轡・兵庫鎖・鉸具・辻金具があります。

耳環—1組（2個）あり、銅芯金銅張りと考えられます。直径2.8～3.2cm・断面径0.8cmを測ります。

【羨道】

土器—須恵器の有蓋高杯1・無蓋高杯1・平瓶1、土師器の壺1が散乱した状況で出土しました。

耳環—2組（4個）あり、銅芯金銅張りと考えられます。1組は直径2.2～2.5cm・断面径0.5～0.8cm、もう1組は各2.3～2.6cm・0.4～0.5cmで、前者には金が良好に残っています。

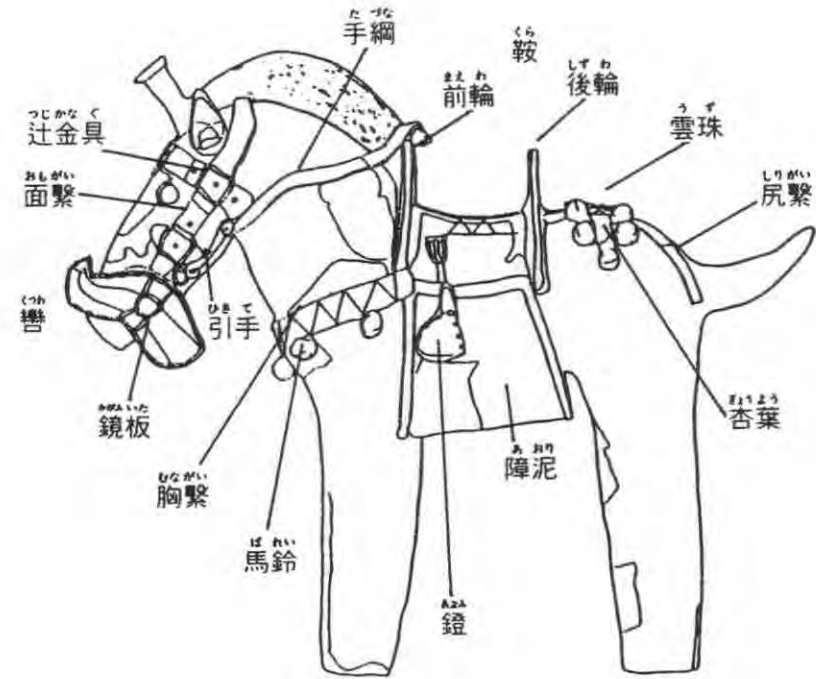
その他、木棺に使用された鉄釘が、玄室部で30本以上、羨道部で5本出土しています。

【墳丘】

盛土はすでに完全に削平されており、またトレンチ部分でも明確な周溝は検出されず、墳丘の規模・形は不明です。

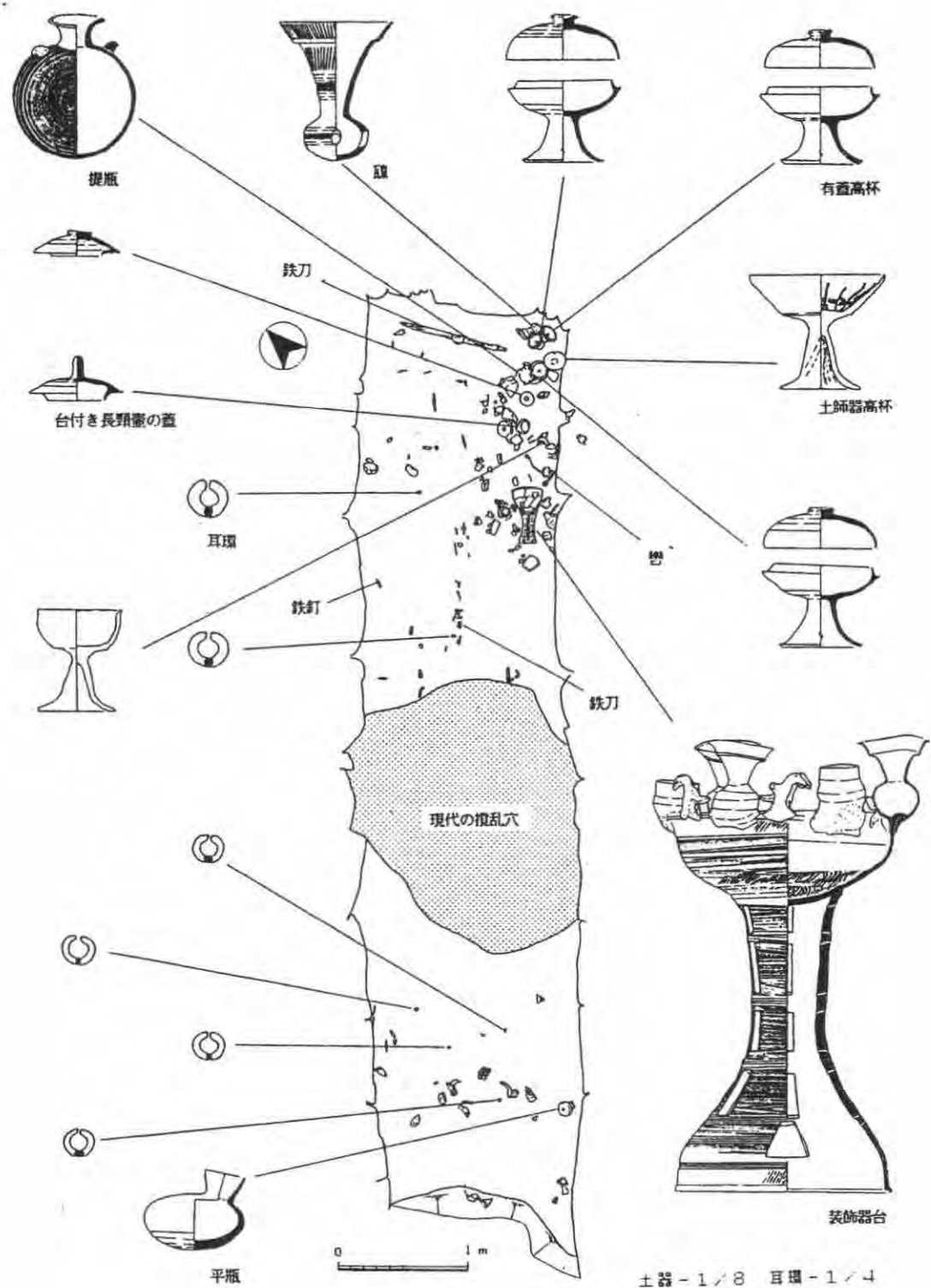
4 まとめ

- ◆出土遺物から、当古墳が造営されたのは6世紀末と考えられます。
- ◆木棺が3基確認され、当古墳には少なくとも3人の人が葬られていたことが判かりました。しかし、その時期差については確認できませんでした。
- ◆被葬者像については、古墳時代前期～中期に「楽音寺・大竹古墳群」を形成した一族の子孫とも考えられます。

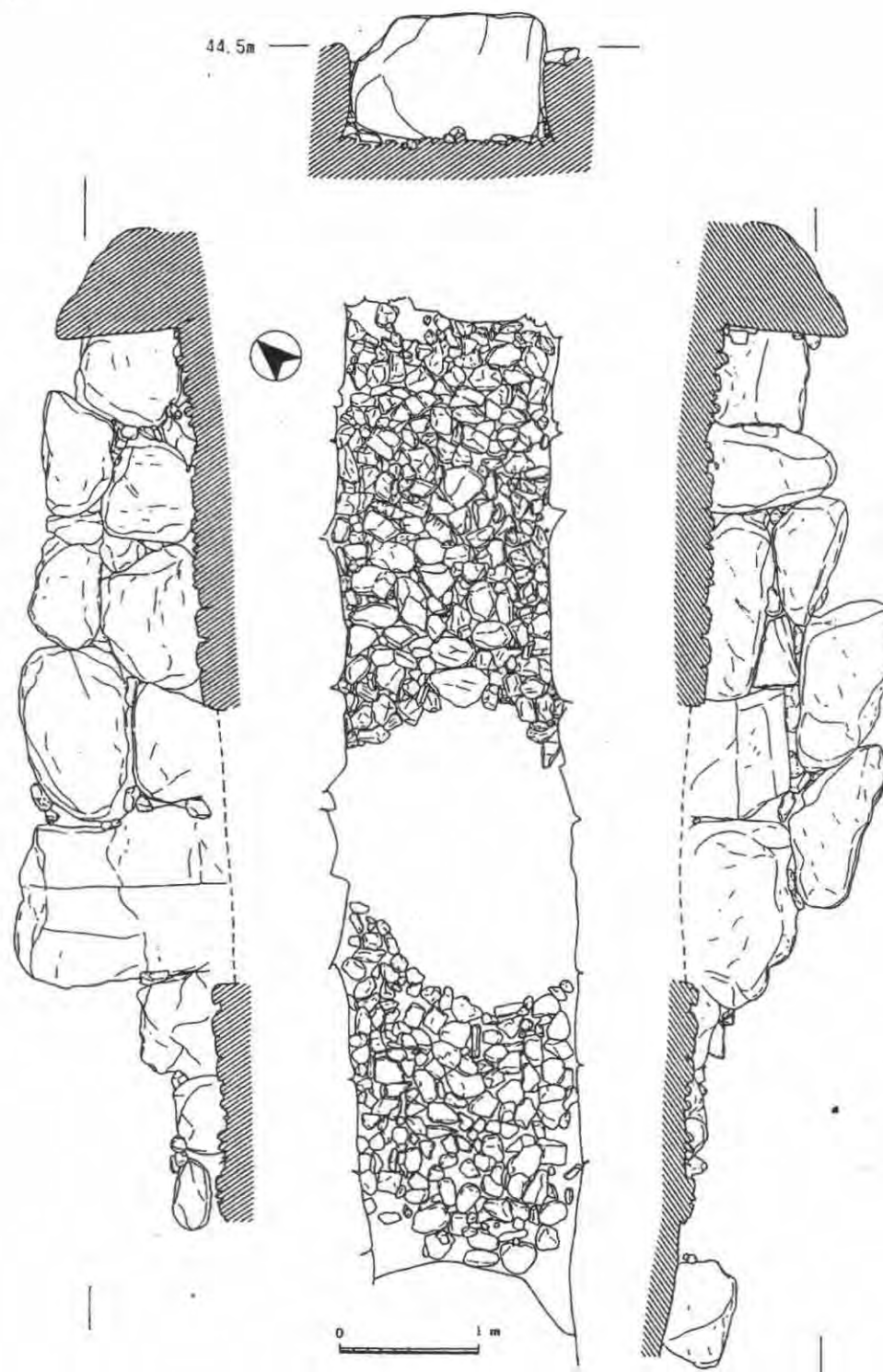


兵庫鎖・・・馬具の一部に使われた鎖

鉸具・・・ベルトのバックルのようなもの



遺物出土状況図



石室実測図